

ハーモニー



第29号

発行：下田市役所企画財政課 編集協力：男女共同参画社会の実現を目指す市民懇話会
電話：22-2212 FAX：22-3910 E-MAIL：kikaku@city.shimoda.shizuoka.jp

chapter 1 市町連携地域実践活動セミナーを開催しました！

平成24年11月16日（金）、道の駅開国下田みなとにおいて、下田市と静岡県共催による「男女共同参画市町連携地域実践活動セミナー」を開催しました。講師に尼崎市顧問・元内閣府男女共同参画局企画調査官の船木成記さんをお招きし『一人ひとりが生き活きと活動できるリーダーを育てる地域づくり』と題し、下田市及び賀茂郡内から32名の方の出席をいただき「男女協働参画」「リーダーシップとコミュニケーション」などについて具体的な事例を交えながら、講演をしていただきました。今回のハーモニーは、このセミナーの様子を特集します。



◎市町連携地域実践活動セミナースケジュール

◇開会：静岡県男女共同参画課 諸星正和課長代理
（午後1時30分～午後1時40分）

◇第1部：基調講演（午後1時40分～午後3時10分）

『一人ひとりが生き活きと活動できる

リーダーを育てる地域づくり』

講師：船木成記氏（尼崎市顧問）

◇第2部：講師との懇話会（午後3時20分～午後4時10分）

次世代育成に関する諸問題を講師と参加者の皆さんで気軽な意見交換を行いました。

【参加団体】

下田市女性の会、南伊豆町粟の会、はつらつ健康劇団

下田ガールスカウト、しもだ子育て応援隊ぽっぽ 他



～船木成記さん（尼崎市顧問）プロフィール～

慶応大学卒業後博報堂に入社。ソーシャルマーケティング手法による環境コミュニケーション、地域活性化、市民参加、市民協働による観光&まちづくりのプロデュースが主な活動領域。2007年9月から2年間、内閣府に出向し男女共同参画局政策企画調査官として、地域における男女共同参画の推進、ワークライフバランスの普及、少子化対策等に従事。内閣府在職中にカエル！ジャパンプロジェクトのプロデュースを行う。
2012年4月から尼崎市顧問、高知大学客員教授。

第1部 基調講演

次のような基調講演をしていただきました。



1) 男女協働参画について

落語の世界は、男女共同参画が求める社会に似ており、健常者と身障者がお互いを認め合い、素直に生活していた（そうしないと生活できないくらい苦しい時代が江戸時代であった）。生活の中にそれぞれの居場所があり、コミュニティの多様性（ダイバーシティ）があった。

今までは、「働くこと」「学ぶこと」「生きること」が別々のプロセスで語られていたが、この3つを1つに融合して考える時代になってきた。「働くこと」はプライベートな生活と切り離されたものではなく、普段の生活を「働くこと」「生きること」に結びつくように考えることが必要。また「働くこと」を「学ぶ」姿勢が大切である。

現代の日本社会は、高度成長期のモデルのままの社会システムとなっている。もともと日本は兼業農家世帯をモデルとして考えられている。男が働き、女が家庭を守る（専業主婦）という家族のスタイルは、高度成長期からである。しかし、現在共働き世帯は全体の65%となっており、実態と社会の認識やスタイルが一致していない状態となっている。

これからの社会は、「男女共同参画」でなく「男女協働参画」と考えるべきである。男女には違いがあり、それを認め合いながら、協働した社会を築きあげる時代。またその社会を実現するためには多様性の確保や自己肯定感・寛容性が必要であり、それが個々の居場所づくりに繋がるはずである。

2) リーダーシップとコミュニケーション

地域づくりにおける真のリーダーシップは、人の成長や学びを「自発的に」促すこと。トップダウン型のリーダーシップは限定的な力であり、グループ全体をマネジメントできるリーダーが求められている。次の世代を育てる力も真のリーダーの資質といえる。

リーダーシップをとる中で、言葉やコミュニケーションは非常に重要な要素である。「伝える（インフォメーション）」と「伝わる（コミュニケーション）」は違う。また、互いに理解し合うには、たくさん話し合う必要があり、話さなければ違いや相違点もわからない。「傷つく」は「気付く」の源であり、意見や見解の相違は、人格の否定ではない。信頼関係を基にした意見のぶつかり合いは大切である。

コミュニケーションの中で「なぜ（WHY）」「なにを（WHAT）」「どうする（HOW）」この3つを考えながら、話すことが重要。その中で「なぜ（WHY）」が今一番重要である。



3) これから求められるもの

男女共同参画とは、世の中全体の共通認識を作ることであり、男性と若い世代の力が特に必要である。

かつては企業が若者を磨き育てる『企業福祉社会』であったが、これからは地域が若者を磨き育てる『地域福祉社会』へ変革する必要がある。そうすることで地域に若者の居場所を作ることができ、かつ若者が地域活動に参加することが多くなる。

基調講演について、参加者から感想を伺いました。

- ◎「もっと硬いお話かなと思っておりましたが、やさしく・示唆に富んだ内容でした。」
- ◎「地域づくりは人づくり。リーダーはコミュニケーションを大切にしたいを語り合い、若い人も取り込んで、次のリーダーを育てるといったお話が印象的でした。」
- ◎「下田のまちがいつも生き活きとコミュニケーションが行き交い、様々な活動があちこちで行われれば、自ずとリーダーも育つと思いました。」
- ◎「リーダーは次の若者を育てる。人を育てるという思いで活動をやってきたので、次の人にバトンタッチ出来た時に、幸せを感じたことを思い出しました。」
- ◎「話が分かりやすく、コトバの持つ力が上手く話され、地域の力の必要性を感じました。リーダーの役割、人づくり、勉強になりました。」
- ◎「仕事、学ぶ、生きるの部分で、身につまされる話でした。以前、子ども（高3・高1）と進路の話をしているとき、同じような話になり、考えさせられることが多かった。学生や親世代に聞かせたい話だった。また、団体の代表をしているので、リーダーシップのことも深く考えさせられました。伝えると伝わる…言葉の大切さが良く分かりました。」

第2部 講師との懇話会



基調講演に続き、参加者の皆さんと講師の船木さんが一緒になり、懇話会を開催しました。参加者の方が所属している各団体の紹介やその活動についてまたその団体の中で何が問題となって、どう対応しているかなど、活発な意見交換が行われました。特に意見が多かったのが、次世代育成が上手くいっていないという意見でした。課題となっている人材育成を含め、様々な場所での積極的な地域活動が期待されています。

懇話会について、参加者から感想を伺いました。

- ◎「様々な活動をしている方々が集まっていたので、もっと話しを聞きたかった。特に今抱えている課題—これから次世代をどう育てるか、活動の枠を広げ、次の課題に向けて、何が必要なのか—等をお互いに出し合い学び合いたいと思いました。出来れば、そういう機会を今後持てたら素晴らしいなあと思いました。」
- ◎「地域の活動状況を知る機会となりとても良かった。会場の席を円状にしたのが良かったと思う。伝えるだけでなく、伝わる工夫が大切ですね。」
- ◎「参加者の方の話題の豊かさでこの懇話会が深い話し合いになったこと。やはり下田地区のリーダーは凄いなと感心しました。答えがちょっぴり見えた気持ちです。」
- ◎「人づくり、楽しかったと思われる活動にしていきたいと思います。良い懇話会でした。」
- ◎「様々な団体があることが分かり、またどの団体も活動を精一杯頑張っているんだなあと感心した。同時に、今回の懇話会を自分の団体に持ち帰り生かしていこうと思いました。」

※男女共同参画情報紙「ハーモニー」へのご意見、ご感想を募集しております。

下田市役所企画財政課企画調整業務担当までご連絡ください。

電話:0558-22-2212 FAX:0558-22-3910 E-mail:kikaku@city.shimoda.shizuoka.jp



輝いています！

はつらつ健康劇団 土屋 穂波さん

今回「きらり輝いています」にご紹介する方は、吉佐美にお住まいで「はつらつ健康劇団」の団長さんであり、脚本家、俳優として頑張っておられる土屋穂波さんです。



常にエネルギッシュな土屋さん

○ 「はつらつ健康劇団」の始まりは、どんなことからだったのですか？

以前、下田市が健診の後に「健康教室」として、講演会等を行っていた時、「もっとみんなが楽しく、そして関心を持ってもらうには…」といった話し合いをしたことが劇団発足のきっかけです。地域の保健委員と呼ばれる方々が、“いきいきサポーター”として生まれ変わった頃でした。この“いきいきサポーター”と一般公募の14人位が集まって健康のことや高齢者の生活問題などを「演劇」にして平成15年から市内の各公民館をまわって公演を始めました。平成20年に市の事業は終了しましたが、「誰もが一生健康維持を願っているんだもの。これはずっと続けるべきだよ。」と、団員の中から声上がり、ボランティア活動として独自に継続していこうと「はつらつ健康劇団」が誕生しました。

○ 順調にその後の活動が進みましたか？

劇団誕生当初は、舞台衣装や道具も自前で作ったりしました。また練習場所がなくて、本当に困りました。その後、「ボランティア連絡協議会」に加入したのですが、この協議会のおかげで練習場所として公民館使用料が無料となり、とても助かりました。また2年前からは下田市社会福祉協議会から補助金を頂くことができ、大いに助かっております。

はじめは、高齢者のデイサービスの場で演じさせてもらいました。内容は「病気の予防は日頃から」「医療費について」などをテーマにしていたのですが、今ひとつ皆さんに合っていないかなあ…と感じていました。そこで、新しく地域の民話や昔話などを取り混ぜて構成するようにしてみたら、とても喜んでもらえるようになり、良かったなあと思います。

○ 最近ヒットした演劇は、どんなものがありますか？

「認知症」についての関心が高くなっていますね。この問題に私も関心を持ち、インターネットで調べたら、岩手県で好評の劇があるということが分かり、その下田バージョンを作ろうということになって、「認知症と普通のもの忘れの違いは？」「認知症になった時、どうする？」「認知症になった人への対処の仕方は？」などの続編も書きました。見てくださる方からの質問もいっぱい出て、この劇が問題提起としての役割を果たしていると思うとうれしくなります。

○ ますますパワーアップしていますね。その秘訣は何ですか？

やはり常に新しいものを取り入れようとする気持ちで活動することですね。最近、吉佐美の民話「正太ものがたり」を劇にして、地域の方に楽しんでもらっています。「正太ものがたり」は、吉佐美出身の出版社社長で、故土屋寛さんがまとめた本から引用したものです。これからは下田の「開国物語」なども掘り起こしていけたらと思っています。最近、実話に基づいた「オレオレ詐欺」を劇にしました。見てくださる方と「会話ができる」「交流しながら楽しめる」「劇による訴える効果が大さい」と思います。これからは見てくださる方と、劇をしたり、踊ったり、歌ったり、会話したり一緒に作り上げるものができるといいなあと考えております。

○ 劇団として大切にしているものは何ですか？

劇団員が現在9人なので、若い人に入ってもらいたいです。少ないながら、チームワークを大切にすること、劇の上手下手でなく「和」を大切にすることが大事。とにかく楽しむことが大切だと思います。セリフ覚えが悪い人がいても、アドリブで進めたり、アンチョコを用意して読んでも良いということにしています。

○ ご主人の評価や協力体制はありますか？

家でセリフの練習で演技指導をしてくれます。シナリオ作成のためのパソコン操作を引き受けてくれます。車での送り迎えも進んでしてくれます。演技の工夫や批評もしてくれるので、影の支援者としてなくてはならない存在です。私がこれまでやってこれたのも主人のおかげと感謝しています。



蓮台寺地区での演劇の様子

【取材後記】

取材を通して、土屋さんのエネルギッシュな生き方がお話の中に感じられました。そのエネルギーの源は、ご主人の支援にあるのかもしれませんが、またボランティア活動や社会参加に対する土屋さんの考え方は、男女共同参画社会を目指す私たちにとって、非常に良いお手本であると感じました。土屋さんは「時間と日にちが許す限り、どこでもご要望があれば、公演に飛んで参ります」ともおっしゃられていました。これからもますますこの活動が発展することを願っております。